

## S-2

### 一調査者が言語の継承にどう関われるか？： 高校生との協働による宮古島諸方言記録活動の事例報告 林由華（神戸大学）

ユネスコにより琉球諸語が日本の危機言語と認定されてから十余年が経過し、話者数は減少の一途をたどっているが、消滅危機の程度は地域ごとにより異なっている。宮古語はその中でも、現在においても最もよく使用されている言語の一つといえるだろう。宮古語は 40 ほどの下位方言から成っているが、現在でもそれらの諸方言の違いがよく保たれ、特に周辺地域では高齢層の人々の地域内の日常言語として用いられている。

登壇者は、2006 年に宮古島での言語調査を開始し、その後も継続的に宮古島諸方言を対象とした記述的研究、記録・保存活動を行っている。本シンポジウムで話題とするのは、その中で 2014 年よりはじめた地元の高校生と共に行う記録保存活動についてである。本シンポジウムは「言語継承」についてのものであるが、登壇者の活動は直接的に継承を狙ったものとは言いにくい。基本的に登壇者自身の宮古語諸方言の記録保存活動を促進することを中心目的として設計され、その中で活動に高校生に参加してもらおうという形をとっている。ただし、それを通して、高校生が現在も生き生きと用いられている祖父母・曾祖母世代の言語やその人たちがもつ知識に直接触れ、少しでも継承への内発的な動機付けとなったり、また活動自体が自然な継承の一環になればという期待がある。これまでの活動で、ある程度はそれが達成できていると考えている（林ほか 2021）。

琉球諸語の研究は、研究者がその地の出身者であったり居住者であったりするケースも多い。しかし、登壇者は、調査地域の出身者でもなく、また居住者でもない単なる一調査者であり、純粋にコミュニティ外の存在である。言語継承には、コミュニティ内における強い動機と継続的な活動が必須であるが、登壇者はそのようなコミュニティ外の存在である自身が研究活動の一環としてできることとして上記の活動を行ってきた。シンポジウム内では、登壇者の活動を紹介するとともに、より地域にコミットした立場の研究者たちとの議論を通じて、本活動の言語継承における位置づけや発展性について考えたい。

#### 参考文献：

林由華，宮古総合実業高等学校生活福祉科，山本史，上田寛人（2021）「地域コミュニティとの協働による宮古島諸方言記録活動の事例報告」『日本方言研究会第 112 回研究発表会発表原稿集』41-48.  
([https://www.researchgate.net/publication/364292110\\_deyukomyunititonoxiedongniyorugongguda\\_ozhufangyanjiluhuodongnoshilibaogao](https://www.researchgate.net/publication/364292110_deyukomyunititonoxiedongniyorugongguda_ozhufangyanjiluhuodongnoshilibaogao))